

「ハラミ焼」でまちおこしに奮起する室根町の「いちのせきハラミ焼なじよったべ隊」。「頭鶏」と呼ばれる代表を務める小山美江さんは「まずは、愛Bリーグ(※)登録を目指します」と力を込める。

「食べ物でまちおこしをしよう」とメンバーと話し合う中で「鶏ハラミ」を知った。ハラミは鶏の「腹膜」。一羽から約20グラムしか取れない貴重な部位だ。かつて、町内の多くの家庭で鶏が飼育されていた時代には、どこの家でも日常的に食べていたという。

決めたら早い。すぐに地元企業に協力を呼びかけ、原料の鶏ハラミを確保。市内産の手作りみそ、南蛮、しょうゆ、桑粉などを使った特製みそダレに漬け、香ばしく焼き上げた。懐かしい郷土食は「今風」にアレンジされ、「ご当地グルメ」として復活。町内の主要イベントに出展すると、「昔はよく食べたもんだ」とうれしそうに味わう人もいた。人気は上々、地元の小売店や飲食店も、販売したり、メニューに取り入れたりして応援している。

春から秋のイベントシーズンは、市内だけでなく市外にも出展し、積極的なPR活動を展開。土日は「ハラミ焼漬け」だ。「大変だけど、メンバー全員が同じ目標に向かってるから頑張れる。まちおこしに夢中です」と熱い。全国各地のグルメ団体との交流も生まれ、応援してもらったり、相談に乗ってもらったりする仲間もできた。

ハラミ焼が「B級ご当地グルメ」として認知されるには「B-1グランプリ」への出展が近道。ただし、愛Bリーグへの登録が条件になる。登録されるためには実績を積み重ねなければならない。厳しい条件が行く手を阻む。「壁は大

※「B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」の通称



④ ジュージュー音を立て鉄板で焼かれるハラミ焼  
⑤ 鮮やかな緑ののぼりが目印だ

Profile いちのせきハラミ焼なじよったべ隊。2009結成。代表小山美江頭鶏。「なじよったべ」は方言。「どうでしょう」「いかがでしょう」という意味。「ハラミ焼なじよったべ」とPRするメンバーは全員が室根町出身。多くが20代の男女。ブログ <http://haramiyaki.blog.fc2.com/>



目指すは「愛Bリーグ」登録  
一関が好き、だから一関を有名にしたい



いちのせきハラミ焼なじよったべ隊「頭鶏」

## 小山美江さん

Oyama Mie 29 会社員 室根町折壁出身

きい。でも、乗り越えたときの達成感はずっと大きいはず。必ずみんなで喜びをつかみます」と使命感に燃える。

愛Bリーグ登録は、まちおこしの手段の一つ。B級グルメとして注目されれば、全国各地から「ハラミ焼を食べよう」という人たちが一関を訪れる。「一番の目的は、街に活気をもたらすこと」と地域の将来を見据える。夢は、「B級グルメの全国大会を一関で開くこと」ときっぱり。「一関を全国に発信す

る機会になる。考えただけでもわくわくします」。子供のような笑顔を見せる。

オープンスタイルの「いちのせきハラミ焼なじよったべ隊」は、ボランティアも募集中。「室根を、一関を愛し、活動に賛同してくれる人なら老若男女、年齢や出身地なども問いません」

「緑ののぼり」と「ピンクのポロシャツ」がハラミ焼の目印。「自分たちが動くことで、街に風を吹かせたい」。高いモチベーションは揺るぎない。



## 柴宿駅

Shibajyuku\_sta.

### 「感謝される駅」

JR大船渡線「柴宿駅」を訪れたのは5月下旬。昭和37年5月15日に開業した同駅は今年50周年を迎えた。

大船渡線の開通は大正14年。駅開業までの37年間、柴宿地域は列車が通過するだけだった。開業したとき地域を挙げて喜んだという。20年前からボランティアで駅舎や周辺の環境整備を行っている「白百合会」代表の菅野志磨子さん(73)が今回の案内人。「昔は残飯なども捨てられて掃除が大変だった」と振り返る。

開業時から無人駅の「柴宿」。駅舎やホームの清掃は、奉仕活動の一環として地元の子供

たちが行った。やがて子供たちから祖父母、父母へと引き継がれ、白百合会へ。菅野さんは「請願駅である柴宿への感謝の気持ちを引き継いでいきたい」と同会が発足しきっかけを語る。

駅舎脇の花壇は、地元の老人クラブ「長久会」(佐藤克郎会長、会員33人)が手入れを行っている。「待ち望んでいた駅だから、きれいにしたい」と佐藤会長。

地域の中心として、毎日多くの人利用する柴宿駅は、「感謝の気持ち」を引き継ぐ人たちの手で支えられてきた。柴宿駅を出ると上り列車は狛鼻溪駅へと向かう。



◀「きれいな花壇を造りたい」と語る佐藤会長。



④ 早朝から花苗を植える「長久会」の会員。今年は9種の苗を植えた。  
⑤ 50周年を祝う看板が掲げられている駅舎の前で勢ぞろいした「白百合会」の皆さん。



⑥ 狛鼻溪へ向かう車窓から。柴宿を出ると長い下り坂を走っていく  
⑦ 開業当時、ホームの脇に植えられた藤。半世紀以上、人の往来を見届けてきた。

案内人 菅野志磨子さん 「白百合会」代表



駅舎の掃除は、会員が交代で行っています。学生などたくさんの人が利用する柴宿駅は地域の中心。感謝の気持ちを引き継いでいきたいです。